

# 出合いの種

小川洋子

毎週一冊、とあるラジオ番組で本を紹介するようになってから七年以上になる。取り上げてきた四百冊近い本のなかで、番組史上スタジオが最も盛り上がったのはたぶん、田山花袋の『蒲団』だろう。

自然主義文学の出発点となり、日本文学史を変えた作品として国語の教科書に必ずタイトルが載っていた『蒲団』。テストの問題にもしばしば出てきた。さぞかし格調高い小説なのだろう。花袋、という名前もどことなく雅な感じだ……、と高校生の頃からずっと勝手に思い込んでいた。ところが、実際に読んでみたら、予想とは大違いだった。自意識過剰で自分勝手な、ダメ男小説だった。

主人公の作家、時雄は若く美しい女との恋を夢見ている。夢見るだけなら可愛いが、妊娠中の奥さんが難産で死んでくれたらいいのに、と願ったりしている。そこに文学を志す女学生、芳子が弟子入りしてきたものだから、時雄の妄想は更なる暴走をはじめ。芳子を美化し、理想的な恋の予感に心躍らせ、勝手に嫉妬

し、手紙を盗み読みして偉そうに説教する。自分の妄想どおりに事が運ばないと、奥さんに八つ当たりしてお膳をひっくり返す。さらには、芳子の処女性に疑いを持った挙句、彼女を蔑み、自分が先に手を出すべきだったというとんでもない腹の立て方をする。

最初、時雄の歪んだ心根に腹を立て、いちいち突っ込みを入れていたスタッフたちも、あまりに正直な描写にあきれ、だんだんとおかしくなってきた。怒りがばかばかしさに転換し、ここまであからさまに自らの卑しさをさらけ出す時雄に、親しみさえ感じるようになった。そして有名なラストシーン、芳子が使っていた蒲団の汚れに顔を押し当て、時雄が泣くところでは、同情まじりの笑いがこみ上げてくるのを、抑えられないのだった。

日本文学とは、何て面白いのだろう。素直にそう思う。高校卒業後三十年以上たち、『蒲団』を読む機会があつて本当によかった。教科書の中には、そんな出合いの種がたくさん隠れている。(おがわ ようこ・作家)